

# スカウト活動活性化のための調査研究



## 団の自己診断

新しい世紀を迎えた日本のキーワードは「改革」だといわれ、連日新聞紙上にこの2文字が踊っています。官民間わず多くの組織が、自らの「健康状態」を見直し、「体質改善」に挑戦しています。私たちのボーイスカウト運動も例外ではありません。

今回ご紹介するガールスカウトと共同で行われている調査研究もそのひとつです。この特集では、昨年実施された組織内のアンケート調査の報告とともに、さらに具体的な活性化の第一歩として、本年度実施される調査のうち、団を対象とした『自己診断チェック表』についてご紹介します。改革を進め、運動を活性化するために、「まず団の自己診断から始めましょう」と呼びかけをはじめます。

(平成12年度に実施した調査の概要は、『スカウティング』7月号「日本連盟からのお知らせ」に掲載しています)

### 調査研究の趣旨

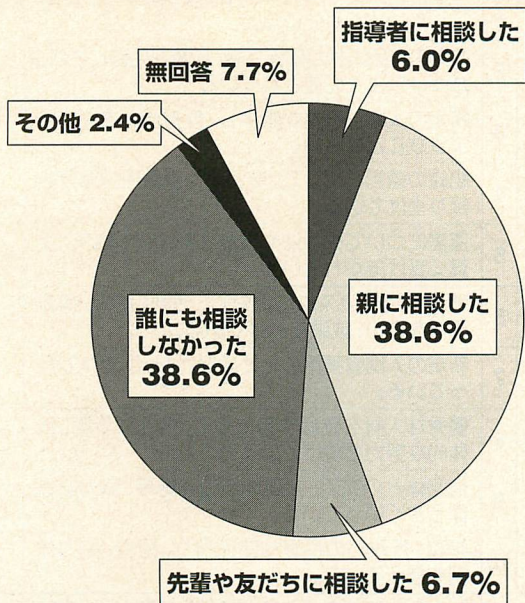
これまで約八〇年にわたり、日本のボーイスカウトとガールスカウトは、青少年の健全育成の名のもとに同様の目的と理念、方法により教育活動を行ってきました。しかし近年、社会の変化、とりわけ少子化などに見られる子どもを取り巻く環境の変化にさまざまな影響を受けており、その中でも加盟員の減少は深刻な問題になっています。ノン・フォーマル教育の重要性が認識されつつある昨今、両団体の運動への参加人数が減少し、多くの団では組織の運営も困難な状況が続いています。

このような傾向を受け、「スカウト運動に対する社会のニーズ、期待感はどうなのかなのか」一問題点として「何が出来るのか」を、スカウト、指導者、保護者など、内部の関係者に対するアンケート調査の形式でまとめたのが、『ボーイスカウト・ガールスカウト活動活性化の為の調査研究について』です。全国の両団体各一五〇団を対象に実施されたアンケートの結果がまとめられています。

※平成13年6月1日に県連盟、県コミッショナー等に配布しています。



## スカウトを辞めたいと思ったとき 誰に相談をしましたか？



### そのときボーイスカウトの指導者は…

- 「理由を聞き本人の意志にまかせた」……33.2%
- 「説得した」……27.6%
- 「相談を受けたことがない」……26.2%

## スカウトの意識について

ビーバーあるいはカブ部門から入り、以後それぞれにボーイ、ベンチャー部門へと上進しているだけに、スカウト活動への評価は概して高く、また、スカウト活動の目指すべき目標、方向に自然と向かっていると思われる。このように長期間活動を継続し、参加しているということは、隊活動が活発に行われ、プログラムもある程度満足のいくものが提供されているのであろう。さらに、同じ活動を通じて得た友だちがいることもひとつの要因のようである。

ただ、多くのスカウトが塾や学校のクラブ活動との両立に苦心しつつ、加えて友だちとの交流など非常に忙しい生活を送っている。約半数近くのスカウトが過去に「活動を辞めたいと思った」ことがあるが、その原因として、学校のクラブ活動、勉強の妨げになると答えている。個人のスケジュールでも学校のクラブ活動、塾などが優先され、いわゆる中途退団に関しては、過去に調査を行った際の要因と一致している。

今回のスカウトたちはそれ以後も活動から離れることなく継続しているが、辞めたいと思ったときに「誰にも相談しない」スカウトが40%近くおり、しかも「指導者に相談した」が10%に満たない状況である。今後、なぜ相談しないのか、その原因を追及する必要がある。保護者に加え、指導者からの適切な助言、指導があれば、最近顕著に聞かれる中途退団へのある程度の歯止めが可能ではないだろうか。

## 活性化を阻害するもの

組織拡充を目指す両団体が、運動の活性化のために今後どのような方向に進んでいけばよいのか、スカウト運動のあるべき姿を考察する内容の報告書となっています。

この報告書ではスカウト運動の活性化を阻害している要因として、次の四項目をあげています。

### 1 プログラム面の問題として

● 個人を大切にし、見守る、責任を与える、最後まで実行させる、自己評価をさせる、意志をよく聞く  
—— ようになっていない。

● 青少年にインパクトを与えるプログラムが開発されていない。

### 2 指導者の問題として

● スカウト運動の価値を提供する責務を果たせない。

● 仕事の忙しさに加えて、スカウト活動への関与などに時間をさき、孤軍奮闘の状況で余裕がない。

### 3 青少年を取り巻く問題として

● 多忙なスケジュール(学校、塾、クラブ、友人関係等)に追われている。  
● グループ活動が苦手。

● 自己表現を希求しつつも、他の人から特別視されることや、孤立感に対する恐怖心を持っている。

### 4 保護者および家庭の問題として

● 多様な価値観に振り回され、子育てに対する自信を喪失している。

● 学歴社会を引きずった教育に熱心であり、早急に結果を求める傾向がある。

● 子どもには何事にも無難な生き方を期待している。

以上のような問題点を想定しつつ、スカウト、指導者、保護者に対するアンケートを実施した結果、取り組むべき課題を明確化しました。

スカウト運動は明確な目的、理念、方法を持ち、世界的な団体として実践されています。しかし、その根幹となるべき活動内容は広く社会に認識されておらず、また、この運動を担う指導者の理解が不足している状況にあることが、活性化の阻害要因の重要な部分ではないかと思われます。教育的効果の高い野外での活動体験を主要な場面として設定していますが、このことが、野外での活動の楽しさや、そこから得られるものが



### 3 保護者について

	設 問	評 価
I 団と保護者の関係	1 スカウトとその保護者は、互いにメンバーの顔と名前を知っている。	
	2 保護者のための電話連絡網を作成し、うまく活用している。	
	3 定期的に保護者との会合を開き、連絡、報告の他に意見を交換している。	
	4 保護者に対して活動のおしらせや報告を行う広報誌、または、通信を発行している。	
	5 活動に対して保護者は積極的にサポートしてくれている。	
II 教育理念の理解度	6 基本的に保護者はスカウト運動の理念や教育方針を十分に理解している。	
	7 我が子にスカウト活動をさせることに、保護者は教育的な意味を感じている。	
	8 スカウト活動を通して、我が子は(他の参加していない子に比べて)成長していると感じている。	
	9 保護者として、学習塾や他のサークル活動より、スカウティングの方が価値が高いと感じている。	
	10 プログラムの内容について、教育的ねらいを保護者はよく理解している。	
III 協力への意識	11 スカウト活動が、学校や地域に対してよい影響があると保護者は考えている。	
	12 我が子がスカウトであることを、学校や地域の人々に積極的に話している。	
	13 スカウトの活動や行事への参加を、地域の人々等と呼びかけてくれている。	
	14 組織を拡充するためのキャンペーンに、保護者としてよく協力してくれる。	
	15 何らかの理由で子どもが「辞めたい」と言っても、引き止めてくれそうな保護者が多い。	
IV 活動へのかかわり	16 スカウト運動を続けていると、進学や就職に有利だと考える保護者が多い。	
	17 保護者の中から、指導者への道を希望する者が多い。	
	18 兄弟姉妹もスカウトとなり、家族ぐるみで運動に参加している例が多い。	
	19 父親も、母親と同じかそれ以上に関心を持ち、活動に協力してくれている。	
	20 登録料、活動費、制服、需品関係の費用については十分に説明を行い、理解を得ている。	

### 4 団運営について

	設 問	評 価
I 団の基本構成	1 年間計画が立てられ、それに基づいてスケジュールが決められている。	
	2 能力のある人材が確保され、役務が明確にされ、バランスよく配置されている。	
	3 特定の人物に役目が集中し、負担が大きくなるようなことはない。	
	4 組織の運営に関して、若い人や少数派の意見も採り上げている。	
	5 運営についての手法や段取り等は、代々の団委員に受け継がれている。	
II コミュニケーション	6 地域社会やマスコミに対し、活動のPR、情報提供を行い、成果をあげている。	
	7 新規の入団者獲得のための努力を、団全体で行っている。	
	8 優秀な人材を確保するために、情報収集等、具体的な努力を続けている。	
	9 他団体との交流、共同作業の実施等、協力関係はうまくいっている。	
	10 学校、行政との良好な関係作り、連絡、協力体制を整えている。	
III 組織の体質	11 スカウト関係者すべてが団運営に関わり、高い意識を持って取り組んでいる。	
	12 団委員は、スカウト運動の理念を理解し、務めに対して責任を持っている。	
	13 団委員は、世界や日本連盟が示す教育方針に対して自分の意見を持っている。	
	14 定期的に団の運営状態についてのチェック、見直しを行っている。	
	15 若い人が発言できるような風通しのよい組織となっている。	
IV 管理と運営	16 活動、団の運営のために、必要な資金が十分に確保されている。	
	17 各家庭に負担を願う活動費の額は、適正な範囲である。	
	18 収支、財政管理は健全に行われ、保護者に正しく報告されている。	
	19 財政面を充実させるための方法を、指導者、保護者、団委員で話し合っている。	
	20 これまでに金銭トラブルや保護者からの苦情はない。	

多くあることなど、スカウト、保護者に共通に認識されていることは、アンケートの集計結果からも明らかです。野外活動を中心とする体験活動は、青少年に最適な資質向上の場面であることは明白と思われます。

ただし、この教育の効果の最終目標は、青少年から成人に至る過程での、野外活動などの体験を通じた「性格(品性)の開発、自己開発」であり、自主的で、責任を伴い、実行力のある人間像を目指すものです。この最終目標への理解がスカウト、保護者や地域社会に明確に認識されておらず、そのことが中途退団や、あるいはスカウトであることに誇りを持つことに対する阻害要因になっているように思われます。

#### 問題の連鎖

このような状況にあつて、活動の現場においても、「スカウトたちの興味や関心にあつたプログラムが実施されているか」、あるいは「スカウトたちが主体性を持って活動に参加できているだろうか」という悩みを多くの関係者が抱えています。スカウト



## 1 スカウトについて

	設 問	評価	
I プログラムへの参画	1	プログラムの立案には、スカウトたちの意見が十分に取り入れられている。	
	2	進歩制度やバッジシステムが、スカウトたちの励みになっている。	
	3	スカウトたちは、プログラムで体験したことを家族や友だちに楽しそうに話している。	
	4	現代の子どもたちの感性や興味にあったプログラムを提供できている。	
	5	実施したプログラムの反省会に、スカウトたちが参加している。	
II スカウトとしての意識	6	スカウトたちは、制服を着ることに喜びと誇りを感じている。	
	7	スカウトたちは、現在実施されているすべてのプログラムの目的を理解している。	
	8	スカウトたちは、指導者の助言を受けながらも、自主的に活動している。	
	9	スカウトたちは、自分たちの姿が他者から「カッコイイ」と見られていると思っている。	
	10	スカウト活動をしていることで、友だちが増えると思っている。	
III 活動に対する自覚	11	スカウトたちは、奉仕の意味をよく理解し、進んで活動をしている。	
	12	現在スカウトたちにとって、スカウト活動を行うことが一番の楽しみである。	
	13	スカウトたちは、運動に参加したことが大人になったときに役立つと思っている。	
	14	現在のスカウトたちの中に、将来指導者になりたいと思っている者がいる。	
	15	言い訳をしては集会を休んだり、活動に積極的でないスカウトはいない。	
IV 登録の状況	16	各部門に適正な人数のスカウトが在籍し、活動に支障はない。	
	17	毎年、現状の加盟人数をキープする程度の新入団者がいる。	
	18	定期的に開かれる集会へのスカウトの出席率は高い。	
	19	部門間の交流・連絡はうまくいっている（異年齢間の活動）。	
	20	特別な場合をのぞけば、中途退団するスカウトの数は少ない。	

## 2 指導者について

	設 問	評価	
I 指導者としての資質	1	すべての成人指導者が、運動の理念と基本方針を十分理解している。	
	2	指導者は全員、スカウトやその保護者から信頼され、尊敬されている。	
	3	社会教育の専門家として自覚し、子どもを取り巻く環境についての情報には敏感である。	
	4	野外活動の知識や技能に優れている、あるいは身につける努力をしている。	
	5	健康管理、体力維持に努め、いつもスカウトと共に行動している。	
II 指導者としての意識	6	指導者として、国際交流活動に興味を持ち、必要な準備を進めている。	
	7	他の青少年団体との違いや、独自の教育方針、活動の特性を話すことができる。	
	8	指導者として、「リーダーシップとは何か」という問いに、明快な答えを持っている。	
	9	指導者は、自身の職業においても確たる実績を残し、社会に貢献している。	
	10	指導者は、自身の家族とのコミュニケーションも良好で、スカウトを指導することへの理解を得ている。	
III 情報収集能力と積極性	11	スカウト年代の子どもが好んで観るテレビやマンガ、流行歌の話題についていける。	
	12	スカウトに常に新しい興味を持たせるように、様々なジャンルについて勉強している。	
	13	一般常識的な範囲であれば、スカウトから質問されても困らない自信がある。	
	14	教育界の動きに関心を持ち、責任と信念を持ってスカウトに接している。	
	15	成人指導者は、互いに活動の質を向上させるための情報交換や勉強会等を行っている。	
IV 指導者の人間性	16	すべてのスカウトたちに対して、平等に接し、個性や才能を引き出してやれると思う。	
	17	スカウトの悩みや苦しみを親身になって聞き、適切なアドバイスができる。	
	18	指導者間で、知識や技能を伝え合うだけでなく、スカウトへの接し方等も話し合っている。	
	19	学校の教師よりもスカウトの指導者の方が、子どもたちから好かれている。	
	20	地域の人々から、善良な市民としてその存在を認められ、信頼されている。	

### 自己診断のねらい

前記の調査研究を受け、さらに具体的な活性化の第一歩を目指すものが、ここで紹介する『自己診断チェック表』です。

ボーイスカウト、ガールスカウトの両団体が、活動現場の団レベルでの健全な活動、組織運営がなされているかをチェックすることを想定して作成を試みているものです。運動

たちがより良い活動をするには、指導者、保護者、団の運営の状態といった周囲の環境を整えることが大切です。問題は、それぞれに単独で存在しているではありません。

諸問題が連鎖的に存在するスカウト運動にあって、現状を打破し、活性化のための方策を立て、実行に移すことは急務です。

そのための第一歩として、まず運動に参加している一人ひとりの意識向上を目指し、現状をより正確に把握し、その問題点を明確にするために、各団における『自己診断』から始めてみる必要があるのではないでしようか。



# スカウト活動活性化のための調査研究

(平成12年度の調査研究より)

## □保護者の意識について

スカウト活動には小学校低学年から子どもを参加させ、半数以上の保護者が何らかの形で運動に参加をした(現在も参加している)経験を持っている。

子どもの入団に際し、多くの保護者がスカウト活動の目的、活動内容についてまで十分に理解してはいるが、他の青少年団体と比較してスカウト活動へ好感を持って入団をさせている。

スカウト活動には、「学校や家庭では得られない体験」「体験をとおしての協調性、責任感、他人への思いやり」「自然との親しみ」などを期待しており、多くの保護者が期待していたことにはほぼ満足している。

また、長くスカウト活動を続けたことにより子ども自身が変化し、その内容も保護者がスカウト活動に期待していたことと同じ内容と答えていることは評価される。自分の子どもには、スカウト活動をとおして地域社会に役立つ人、自分の能力を発揮できる人になってもらうことを期待している。

ここでもスカウト活動の社会での評価は「認められている」と「認められていない」が半々となっており、PRの促進やプログラム開発を求める声が多く出されている。

## □指導者の意識について

指導者は、年代では40～50代、指導者の経験年数10年以上、60%がスカウト活動の経験を持っていない。今回の調査では、標準人数を満たしてはいるが、活動自体は活発に行っているところが多いように見受けられる。プログラムについても、各々の指導者がスカウトのニーズにあわせる形でいろいろと工夫を凝らし、実施している。

また、現在の社会情勢を反映してか、指導者の確保には種々苦労があるようだ。指導者のなり手がなかなかおらず、このためにレベルが下がっているとすると、指導者の確保、養成を含め今後の対策が重要になってくる。

多くの指導者が、スカウト運動の目的、理念についての理解を持ち、「ちかい」「やくそく」「おきて」を日々の生活の中で実践するよう心がけている。

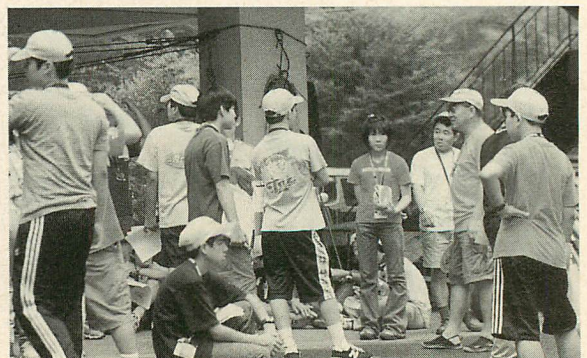
しかし、こうした指導者の努力にもかかわらずスカウト運動自体が社会にはなかなか認められていないと感じており、今後の活性化のためには、青少年にあったプログラム開発、質の高い指導者の養成を進めつつ、学校や地域社会、行政との連携を強化することが重要な方策と考えている。

の基本、教育方針に関連した設問、日常の心構えや取り組みの意識についての設問を短い文章で用意し、簡単に回答できるようにしています。

六～七頁の表を見ていただければわかりますが、設問のシートは「1」スカウトについて「2」指導者について「3」保護者について「4」団運営について「5」の四種類。それぞれに、二〇ずつの設問を用意しています。さらに、問いの傾向によってI～IVにグループ分けされています。例えば、「1」のIのグループ1～5では、スカウトのプログラム参加について、関連した問いが並んでいます。

あくまで自己診断ですので原則として誰が記入してもかまいませんが、団の運営にあたってはいる団の代表者、指導者の中心的な人に、「うちのスカウトはどうだろう…、保護者はどうだろう…」と考えながら記入していただくことを想定しています。

評価の方法は三段階。「A」あてはまる「B」ややあてはまる「C」あてはまらないで記入していただきます。目安として「A」5ポイント「B」2ポイント「C」0ポイント



で合計ポイントを出し、その団が、どのあたりに問題を抱えているかを知ら手がかりとしていただきます。

ただし、点数の高さを競うものではありません。もちろん用意された設問ですべてがわかるといってもありません。

## コミュニケーションの芽生え

例えば、団委員の方が数人で話し合いながら記入したり、指導者、保護者など立場の違う人々が各々に記入し、評価の違いを話し合ったり、スカウトたちにインタビューしながら



# スカウト運動の原点

ボーイスカウト・ガールスカウト活動活性化調査研究

検討委員会委員 牛山佳久

(ボーイスカウト日本連盟副総コミッショナー)

昨年度に引き続き、本年度も文部科学省の調査研究助成事業として、ボーイスカウト・ガールスカウト運動の「活性化に関する調査研究」を行うことになりました。

文部科学省をはじめとして関係各方面から、日本の青少年教育においてボーイスカウト・ガールスカウト運動の社会に果たすべき役割は大きく、その「活性化」は急務であるとの認識と期待があります。両連盟としては、それに応える責務があるのです。

昨年度は組織内の意識調査を中心に行い、今年度は別記のとおり「団の自己診断」を中心に、「活性化」を検討していくための「団の実態把握」と、「自己診断による問題点の把握」を行うことになりました。

もとより、「活性化」のためには組織全体として、日本連盟、県連盟、地区での「自己評価」と活性化の方策の検討は欠かせないものです。日本連盟本部の「評価」もするべきであるとの、外部の委員の方々からの指摘もあります。

これは日本的な風土の特徴かもしれませんが、ボランティアを中心とする運動の場合には、「自己診断」や「評価」をあまり重要視してこなかった性質がありました。しかし、これらの「自己診断」や「評価」を明確にすることで、自らの組織が本当にスカウト運動の目的・原理・方法に合致しているのか、青少年の「性格の開発」に役立つプログラムが提供され、保護者や地域に受け入れられているのかなどを検証し、改善のための方策を立てることが、必要なことであろうと考えます。

日本連盟でも、「長期戦略計画策定委員会」を設置して、現在二〇〇二年三月の答申に向けて、様々な議論を行っています。まもなくその戦略の内容が明らかになると思います。

今は、それぞれの役割を通じて、「自己診断」「評価」を明確にするべきです。その結果として、何を為すべきかが明確になるでしょう。

創始者B-Pは一九三九年に、「スカウト訓練において、我々は前途に

より高い目標を掲げるようにして、手段にあまり心を奪われないようにしましょう。(中略)精神面より技術面にウエイトをかけすぎないようにすることである。(中略)最終目標は性格である。すなわち目標を持った性格である」と述べています(B-Pの展望) 於保信義訳。

「自己診断」や「評価」を通じて「スカウト運動の原点」とは何かを検証し、両連盟の「活性化」を目指していきたいと考えております。



ら記入したりといった感じで、団内に新しいコミュニケーションが芽生えればよいと考えます。

この「自己診断チェック表」と向かい合い、各団において何ができていのか、どこが弱いのか、足元を見直す機会としていただければ幸いです。

## 活性化スパイラル

現在のスカウト運動は、困難な状況がさらに次の困難な状況を生んでいます。「活動内容があまり知られていない」▼「参加する人が増えない」▼「おもしろい活動ができない」▼：といった具合입니다。

これを何としても逆向きにし、活性化スパイラルを生み出さなくてはなりません。すなわち、「理念や教育方針を周知し、活動の実践を広く社会に認めてもらう」▼「加盟員を増やし、組織を拡大する」▼「活動のプログラムをより充実させる」▼：という良い方向にまわしていきたいものです。「自己診断」はそのための第一歩です。ここに掲載したチェックシートを参考に、各団でアクションを起こしていただきたいと考えます。